

寝床屋の無料配布

・夜更けの酒宴

⋮

3

「……その時、生暖かい風がふわあつと……」

「うわあああああつ！」

魂消るような叫び声が上がって、そこはかとなない緊張と恐怖感に満ちていた狭い長屋の空気が崩壊する。ぶはっ、と座敷の皆が吹き出した。

「なんだな、そねエに叫ぶこたアねエだろう？」

話をしていた永井ながいのふやす亘保が耳を押さえて一くさり文句を言った。

「肝の小さいことよなア」

小梅婆さんが抑えきれないとわんばかりに大爆笑した。

「オツ、オキヤガレ！ 首筋に風が吹きやがったんだヨ！」

十軒店にある貧乏裏長屋で医者を営む、小杉勘造が怒鳴る。

「オイオイ！ 今何刻だと思ってるんだエ？ もう四ツ（午後十時）だワナ。いい加減に寝やれ！」

どんだん、と隣の長屋との壁が激しく叩かれて、怒鳴り声があった。その声に、

座敷に集まった連中が慌てて口を押える。そして暫し互いを見やると、勘造を見ていたひとりの男の目元がにやりと緩む。

「お前が始めたんだろうが」

潜み声ながらも、勘造が永井を怒鳴る。当の本人はにやにやとして悪びれた様子もなく、茶碗酒を呷った。

一方の勘造は、話に合わせて首筋に風を吹き付けたヤツは誰だと座敷をねめつける。

「マアマア、落ち着きねえナ。怖がりを知れたからって、怒るほどでもねエだろ？
な、チロリよウ」

扇の地紙売りをしながら、目明しの手下を務める辰之進がそう言うが、笑いが隠せてない。チロリとは、小杉勘造の渾名である。チロリは本来酒の爛をつける道具だが、中身が入っていないければものの役に立たないことから、酒を飲まなければ仕事を始めようとしなない勘造を揶揄したものだ。

「百物語だてエのに、さつきから一つも話しゃアしねえし。怖いなら我慢しなくたって良いんだぜ」

「べらぼうめエ。あんな話が怖いものかエ。話に合わせて脅かしたからびっくりした

だけだ。ふざけやがって」

勘造はそう言うと、肩を震わせて笑っている辰之進の肩を拳でどやした。それだけでは腹の虫がおさまらなかつたらしく、座敷の真ん中に置いてあつた貧乏徳利をむんずと掴むと、ぐびぐびと呑んだ。

「オイ、チロリ！ わっちの酒に何をする！」

若い頃は座敷に呼ぶなら梅若をおいて他はない、とあちこちに引つ張りだこの芸者だつた小梅婆さんが、裾を乱しながら勘造の徳利を掴む手を叩く。彼女は同じ長屋の住民だ。彼女の長屋から一番近い、勘造の所の竈を当然の顔をして使いに来ていたのが、いつの間にか勘造の手伝いをするようになっていた。おまけに、昔取つた杵柄という奴か、生来のものか、齒に衣着せぬ物言い、客ならぬ患者あしらいも上手かつたので、勘造もそのまま任せているような状態だ。

「お前の酒も凶々しいぜ、婆さん。チロリ、謝つた。謝つたから酒イ、離しねえナ」
小梅婆さんと辰之進が勘造から徳利を奪い返そうと取っ組み合っているのを肴に、永井がゲラゲラ笑いながら自分の酒を飲んでいた。

「いい加減にしねえナ！」

ドンドンドン！ と再び壁を叩かれて、取っ組み合いが止まった。

「あーあ、ほとんど飲んじまいやがった」

辰之進が徳利をひっくり返す。ちよろちよろ、と流れ出る酒の勢いが、自らの残りが少ないのを主張した。すかさず小梅婆さんと永井が茶碗を差し出して相伴を要求してくる。

「もう仕舞だ」

辰之進がそれでも、残り僅かな酒を二人の茶碗に注いだ。勘造はそんなやり取りなれどどこ吹く風、と言わんばかりに自分の茶碗を傾けていた。

一日の終わり、勘造と小梅婆さんは二人で酒を飲む。そこに時々、ひよんな縁で知り合った辰之進や、永井がふらりとやってきて酒を飲んでいく。今日は珍しく四人もの人が九尺二間の長屋に集まった。

そこで、何故か夏を惜しむように百物語もどきが始まったのだった。

とん、と茶碗を床に置いた勘造は、一際酒臭い息を吐いた。

「よっし。お前エら、耳かっぼじってようく聞きな」

そう言っばしん、と噺家か講談師のように己の膝を一つ叩く。小梅婆さん、永井、

辰之進はなにが始まるのかと勘造の方を見た。

「これは俺が長崎で修行していた時の話だ」

勘造はぼつりぼつりと話し出す。

「ある夜、急に男が来てサ。女房の様子がおかしいから、すぐに診てくれって言うんだ。師匠はもうその頃は随分と歳を取っててサ、師匠にも頼まれて、俺が代わりに行くことになった」

勘造が酒で口を湿す。

「雲がかかった真つ暗な夜でな。随分歩かされた先に案内されたのは、立派な屋敷だった」

「化かされたつてエ時には、良く聞く話だな」

辰之進が混ぜつ返すのを、勘造がその通りだと頷く。

「奥まった座敷に燈台がいくつも置いてあって、そりゃア明るかった。座敷の真ん中に几帳を建て回した寢床があつてサ。いかにも身分が高そうだって飾りつけだから、俺もハハア、コイツは担がれたな、と思つたワケだ。案内して来た男も、酔狂にも時代がかつた格好だったしな。けど、そいつがなにとぞお助けを、なんて拝みながら言

いやがる。そんなら狸かモノノ怪か、一丁見てやろうってエ思つてヨ。それこそ、眉に唾つけて几帳の中に入った。寢床にや、透けるような白い肌の女が寝ていて、苦し気な息を吐いていた」

長い髪は乱れ髪箱に丁寧に入れられていた。寢床も夜着も光沢のある絹のようで、騙されていると言う疑いの目で見ると随分と凝った仕掛けに思えた。

「ああ……、腹が……、腹が苦しくて切のうございます」

苦しい息の下から、女が儂げな声でそう言った。見れば、確かに腹が膨らんでいる。失礼、と触れた手首はぞつとするほど冷たく、脈は弱々しかつた。

「奥方は身籠つておられるのですか？」

勘造はそう尋ねようと几帳の外を覗いたが、誰も居なかつた。これはいよいよ怪しいと思つた一方、苦しむ様子が余りに哀れだつた。

勘造はご免、と言つて夜着をバサリと捲つた。と、女の腹がはち切れそうに膨れ上がっていた。白い襦袢が捲れて、不気味に膨れた腹と、白くむっちりとした足が露わになつていた。

「なんだア、こりゃ」

勘造は思わず呟いた。

「お願い申します。どうか、お助け下さいまし……」

女の高い、力のない声。顔を見れば、ころりと涙が一筋流れた。

助けてくれと言われてしまったら、医者として手を尽くさないわけには行かない。

医は仁術を地で行く熱意溢れた青年だった勘造は、仕方ねえなと思いつながらもなんとかしようと思つてしまったのだ。

「奥方様は身籠られてどれほどになりますか？」

しかし、女からは答えがない。

「くるしい、せつない……」

聞こえてくるのはそんな言葉だけだ。

「赤子にしてはデカすぎる……」

諦めた勘造は膨れた腹を見る。十月十日の女の腹にしては大きすぎた。その腹が突然ぐにゅと動く。女が苦しきで、ああ、と声を洩らした。

「なんだ、今のは」

女の腹の皮が内側から盛り上がって、明らかに手のような形が見えた気がした。

この女の中には、何が居るんだ？

「……切るか……？」

持参した道具を見ながら自分に確認するようにそう呟いた途端、腹がぶよぶよと動いて暴れ出した。

「ああ……、いたい……、ああ……」

悲鳴すらも上げられないほど辛いのだろう。女は身を振ることも出来ず、辛うじてそれだけを言った。女もそうだったが、腹の暴れる様子が余りに苦しそうで、思わず手を伸ばして触れた。と、あれだけ膨れていた腹がすつと凹んだ。まるで中身が元々なかつたかのように、真つ平らになってしまった。ああ、と女が安堵の声を洩らした。

「わた……、し……？」

女が正気を取り戻したのか、不思議そうに呟きながら起き上がって、自分の身体を見下ろす。さつきまで青白く、今にも儂くなりそうだった女とは思えないほど艶めいていた。乱れた襦袢から色気に満ちた肌が覗いていて、勘造は慌ててそっぽを向いた。

「我が妹背よ」

「ああ、我が君……」

どこにいたのか、案内に来た男が座敷に入って来て、大仰なほどに女を抱きしめた。

「貴方は命の恩人だ」

男は感極まって泣きながら、勘造の手を取る。

「いや、おれ……、わたしは……」

何もしていない、と言い訳したいのに、夫婦はこつちの話など聞く気はないようだ。

「お礼を是非」

「いやいや、礼なんて……」

勘造が固辞するのを遠慮していると勘違いした相手は、礼は勿論だが、せめてもてなしをさせてくれとしつこく食い下がる。そこまで言われては断りにくく、渋々と用意された座敷の席に座った。一杯飲んで帰ろうと思つてゐる間に、この屋敷にこんな人がいたのかと思うほどに女中たちが入れ替わり立ち替わり、膳や大皿を運んでくる。そして、勘造に飲め、飲め、と酒を勧めてきた。

主人である男は親し気に肩を組んで座り込み、そしてさつきまで具合の悪かったはずの女房までもが、媚を含んだ様子で勘造の隣に陣取つて酒を飲めと言つてくる。

三回に二回は断つても、何度も酒を勧められるせいで、流石の勘造も酔いが回つて

きた。

酒を飲めば、当然遠からず催すことになる。勘造は厠に行くとは断って席を立った。奥まった厠で用を済ませて、座敷に帰ろうと酔いの回った足取りで廊下を歩いていると、ボソボソと声が聞こえた。なんだろうと声の元を覗いてみると、この屋敷の夫婦が嬉しそうに互いに顔を見合わせて笑っていた。邪魔しては悪いと立ち去ろうとしたところで、思わぬ言葉が飛び込んできた。

「生きた、若い……」

「生き胆が……、精がつく……」

「血の一滴まで吸い尽くさねば……」

夫婦がくつくつと笑いながら、ぎらりと大きな庖丁をかざして、刃の研ぎ具合を調べていた。

「まさかスツポンの話じゃあるめエ。イヤ、コイツア、俺がスツポンだてエ、ぞつとしてヨ。そのまま泡食って逃げ出したつてエワケよ」

ようやくと屋敷の堀に登ったところで、「いないぞ！ 探せ！」と言う怒鳴り声が屋敷から聞こえてきた。勘造はいよいよ捕まったら食われてしまう、と大慌てで堀を

降りる。そして、走った。足が縛れ、何度も転びながら必死に走った。

後ろから先生、先生、と呼ぶ声が聞こえて、幾度もこのままでは捕まってしまう、と恐怖に襲われた。どれだけ走ったか判らない。いや、もう走れない。息も絶え絶えに、よろよろになりながらようやくと歩いていてる状態だ。それでも、まだ後ろからは、先生、先生、と呼ぶ声がする。

川べりの道に出たところで、遠く空からお天道様の赤い光がさあつと射した。

「ああああ」

女の甲高い悲鳴が聞こえた。

「おのれ、逃げられたか……」

そして、男の悔しそうな声。勘造は力が抜けて、道端に座り込んだ。後ろがどうなつたか、知りたかったけれどもどうしても振り向けなかった。そして、這う這うの体で何とか師匠の下へ戻ったのだった。

「それから毎晩サ。戸を叩くんだよ。先生、先生ってナ」

と、おもむろに「先生、先生え」と言うか細い声とともに、ホトホトと腰高障子が叩かれた。

「ひいっ！」

「なんまみだぶ！」

と、叫び声が上がった。

勘造がへいへい、といい加減な返事で戸口に向かう。腰高障子の向こうにいたのは、さつきまで文句を言っていた隣の長屋の男だった。

「エエ、先生ヨ。なんだってこんな夜更けに怪談なんぞしやがるんだよう。妙に聞き入っちゃまって怖くて寝れねエじゃアねえか。見なっし、皆震え上がっていらア」

大工だと言うごつい身体つきの男が半泣きで文句を言いたて、長屋の中を指した。振り返って見れば、辰之進と小梅婆さんが恐怖から逃れるように互いに縋り付いていた。そして、勘造の視線にはっと我に返る。

「ヤ、こいつア、ちが……」

「エエ、いつまでもくつついてるんじゃアないヨ！」

辰之進と小梅婆さんが慌てて離れながら、言い訳をし始めた。

「ナニ、怖いなら我慢しなくたって良いんだぜ」

勘造は、先刻の仕返しだと言わんばかりに、にやりと笑った。

「やられた……！ 道理でどこかで聞いたような話だと……」

辰之進が頭を抱えて叫び、小梅婆さんは引つ掛けられた腹いせに、傍でニヤニヤしながら酒を飲んでいた永井を、拳でぼこん、と殴った。

「お前さんも、その嫌みったらしい笑いを引つ込めなイ。エエ、好かねえ！」

「おおツト、くわばらくわばら」

永井は小梅婆さんの拳を受け流しながら、笑っていた。

後日。

いつも通り上がり框から長屋の前に置かれた床机まで、近所の爺さん婆さんを始め、大工から子連れの女房連中まで、病人も病人じゃないのも寄り集まって騒がしくなった長屋に、大家が乗りこんで来たと思うと、につこりほほ笑んで口を開いた。

「いいかエ、チロリ先生。イヤサ、小杉先生ヨウ。大家のあたしが言うのもなんだが、ここは貧乏長屋だよ。だからってタダじゃアない。アンタ幾つ店賃溜めてたかねエ。それでも他の店子に先生のところは勘弁するのかと責められようと、払え払えとしくく言わないのは、大した金も取らねえで困った皆を診てくれてるアンタだからこそ

だよ。そう言うあたしの気持ちは汲んでくれてると思つていたがねエ。ちつたア悪びれるならまだしもさ、夜遅くまで良い歳した大人が集まつて大声あげて騒ぐつてナア、随分と勝手じゃアありませんか。おまけに酒飲んでたつて言うじゃアないか。飲まなきやお医者が出来ないつて理屈はとんと判りませんがね、アンタが酒好きなのは知つてますよ。だからつて飲んで騒ぐ余裕があるなら、一つでも半分でも、大家さん、毎度申し訳ないが、これで一つご勘弁を^{つて}店賃を持つてくるのが筋つてもんじゃアありませんか。大体、小梅姐さんも姐さんですよ。あの梅若が居てこんな下卑た大騒ぎを許すなんざア考えられませんか。座敷の取り回しじゃア姐さんの右に出る者はいないほどだつてエのに、寄る年波には勝てないつてエンですかねエ……」

などと、大勢の前で勘造と小梅婆さんがネチネチ怒られる羽目になつた。

以来、夏の季節が来るたびに、大家の達筆な筆さばきで書かれた、「深更ノ酒宴、百物語ナド、えんりよくださるべくそつろうゴ遠慮可被下候」と言う張り紙が、長屋の入口にデカデカと張り出されるようになった。

0927HELLO!!# エアブー

寝床屋の無料配布

2020/09/27 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回も無料配布を作ってみました。
ホラーは得意でないので、
あんまり怖くない方向で書いてみました。
(とか言いながら、ホラー系ミステリーを
読んだりしてますが)
扇坊は勝ち気で意地悪な婆さんと、嫌味を
ネチネチ言う爺ィを書きがちです。(汗

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書は今後、頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。